

日本経済新聞
2014年9月12日 (金)
夕刊掲載記事

小中学生が各国の駐日大使館を訪ね、食や伝統文化に親しむ取り組みが広がっている。旗振り役は外国語の学習塾から学校、保護者まで様々。白国への理解の深まりを期待する大使館側も協力を惜しまない。「外国語の習得にとどまらず、国際感覚も身につけてほしい」と新たな試みに対する教育関係者らの期待は大きい。

小中学生ら訪問

「ジンドブレ（こんにちは）」。皆さん、楽しんで下さい」。8月下旬、東京都目黒区のポーランド大使館で、職員が約40人の幼稚園児や小中学生を笑顔で出迎えた。

地元の伝統料理を真似て終えた子供たちは、案内役のドミニカ・ヤキモウィッチ領事らに「ポーランドでは100円で何が買えるの」「観光地はどこがお薦めですか」と次々に質問をぶつけた。ヤキモウィッチ領事は「子供たちは小さな大使大人になった時、日本との関係をより親密にしてくれるはず」と期待する。

今回の取り組みは子供向け国際教育教室「フモス・インターナショナル・スクール」（東京・目黒）が企画した。2009年以降、約40カ国・地域の大使館訪問やスピーチコンテストを開き、今夏はタイやブラジル、スペインなど7カ国の大使館を訪ねるイベントに約180人が参加。相馬円香代表は「大使館は子供たちのポーランド大使館」



ちが異文化に触れるうえで、身近でつってつけの存在」と強調する。大使館側も子供たちの興味をひくこと、もてなしに工夫を凝らしており、ブラジル大使館（同・港）は、子供たちも参加できるプロ演奏家のサンバ表演会を開催。インドネシア大使館（同・品川）でも、日本に暮らす同国の小学生が民族舞踊を披露、日本の子供たちに振り付けを教えた。

国際感覚を養う

ブラジル大使館を訪れた新潟市の小学4年、堀井映



希望さん（9）は「アマゾン」のきれいな植物を調べて、

英語でスピーチできるようにしたい」と目を輝かせた。保護者も旗振り子供たちの国際感覚を養おうと、保護者が率先して大使館との交流を図る活動も根付いている。東京都大田区の通訳業、仲原かおるさん（43）は、6年前から母親仲間らと大使館訪問を始めた。

幼稚園に通う長男（6）に「自分の意思を表現する大産産が開いたサンバの実演会に参加した子供たち（8月、東京都港区のブラジル大使館）」

大使館は教室だ !!

異文化に触れる

文部科学省は、2011年度から小学校5、6年での英語教育を必修にするなど、語学力の強化に力を入れているが、国が目指すグローバル人材の育成に向けては「日常的に異国の文化に触れる機会を持つことも重要」との声が上がっている。

グローバル人材育成

文科省は08年に改訂した学習指導要領の解説で、外国語活動の目標として「言語や文化の体験的な理解」や「コミュニケーション力の育成」を柱に位置付けた。近年、各地の小中学校に外国語指導助手（ALT）が配置され、

語学だけでなく「体験的理解」重要

モデル校に指定された一部の小学校では1年生からの英語教育が実施されるなど、子供たちの外国語能力の向上に向けた取り組みは進んでいる。ただ、筑波大の明城祐司教授（英語教育学）は「語学の習得に重点を置いた指導ばかりが目立ち、言語や文化の体験的理解につながる教育が十分に実践されているとは言えない」と指摘する。明城教授は「幼い頃からの外国人との触れ合いは、子供たちの学ぶ意欲や興味・関心を高めるのに効果的。異文化に触れられる環境を整えることが、国際的に活躍できる若者を育てる上で不可欠」と強調している。

能力をしっかりと身につけてほしい」との思いからだ。各国の大使や外交官らによる絵本の読み聞かせ会やクイズ大会などを開き、交流先は約30カ国に上る。教育効果を期待して大使館訪問を導入した学校も、10年に開校した私立昌平中学（埼玉県杉戸町）は毎年、中学1年の課外授業で、インドや中国など新興諸国を中心に大使館を訪問する体験学習を実施している。今年には新たにフィジーやジャマイカの大使館からの協力も得られた。生徒らは大使館での学習結果などをレポートにまとめて授業で発表する。同校の前田敏平教諭は「英語圏の国よりも、普段なじみの少ない国に接した方が、文化や価値観の違いも体験でき、様々な国に幅広く興味を持てるようになる」と話している。